

うまくいく時間管理／9歳、10歳ベスト対応60／陰山式音読メソッド

AERA Kids

with

2017 秋号

定価780円

ウィズキッズ秋号

陰山先生による
音読指導
約20分オリジナル
動画付き



成功する 「塾活」

子どもの
頭痛、肩こり



やってみよう!



解説動画付き

頭が良くなる! 陰山式音読メソッド



話題の学習マンガ

「ゆる勉」アプリ

どんな子でも
うまくいく!



時間管理

読者がチャレンジ!
「早くしなさい」を言わない
一週間プログラム

この時期なにかとムズカシイ……

9歳、10歳



ベスト対応60



花まる学習会代表
高濱正伸の

この人、 花まる上昇中！

(株) VILLAGE INK 代表
橋村和徳さん



日常から隔絶された贅沢な空間と時間を提供する会社が、ヴィレッジインク。キャンプ場は1日1組限定ですが、参加人数は4人でも100人でも対応可能で、使い方も利用者次第。求められれば、さまざまなアクティビティーのコーチングもしますという型破りな事業を興したのは、橋村さんが36歳のときでした。たった一人で荒地の草刈りをするところから始めたという熱い思いと行動力は、いつ培われたのでしょうか？

おながすいたら魚をとる
野生児だった少年時代

高濱 橋村さんのことを知ったのは、うちのスタッフの紹介でした。「高濱さん、すごく面白い場所があるから行きましょう」と。半信半疑で行くと、本当にすごかった。20万坪の土地を軽トラで走り回っていると、イノシシが横をダダッと走っていく。なんなんだ、ここは！と。要は、野性味あふれた魅力的な土地を、1日1組限定で提供する。利用者は、自給自足のワイルドキャンプをするもよし、ケータリングを頼んで今流行のグランピング（グラマラス・キャンピング）を意味する造語で、

ぜいたくなアウトドア体験するもよし、アクティビティーを満喫するもよし……。すごい発想ですよ。いつから考えてたんですか？

橋村 最初の発想は、非日常の空間でアウトドアを楽しみたいという、シンブルなものです。要は、自分が小さいころ楽しんでたことを、大人になっても続けたかったんです。いや、大人こそ、そういう場所が必要なんだ！と。

高濱 出身は佐賀県の唐津市ですね。
橋村 はい、玄界灘で育ちました。朝から晩まで、ひたすら野山を駆け回ったり、海に潜ったりの毎日でした。おながすいたら魚や貝をとって食べてましたね。

花まる学習会代表
高濱正伸
(たかはま まさのぶ)さん
1959年、熊本県生まれ。東京大学大学院修士課程修了。塾講師や幼児の野外活動の指導者の経験をもとに、93年に「花まる学習会」を設立。子どもの生き抜く力を重視した教育で幅広く活躍中。

(株)ヴィレッジインク代表
橋村和徳
(はしむら かずのり)さん
1973年、佐賀県生まれ。中央大学文学部卒業。2000年にIT系会社を起業、株式上場・中国進出を果たしたのち、10年に伊豆に「アクアヴィレッジ」を立ち上げる。卓越したプロデュース力で、数々の場を演出中。

人生の中で一番集中していたのは 小・中学生時代。野山を駆け回り 海に潜り、魚を銚で突くことに 全身全霊をかけていました

(橋村)

生活だったんですが、初めて下から2番目の順位というのを経験しましたもん。こりゃ、勉強しなくてはとあせりましたね。

価値観の広がった高校時代
華やかな世界に浸った青年時代

高濱 まさか、急に勉強にいそしんだわけじゃないですよ（笑い）。
橋村 はい、あせっただけ（笑い）。成績が落ちたことよりも、これまで周囲にいた人たちとまったく違うタイプの人間に出会ってびっくりしましたね。生徒の半分以上が県外出身者で、すでに将来のことを考えていて、海外に行くぞ、起業するぞ、と当時から口にしていましたから。世の中にはいろいろな価値観があるものだなと。僕が最初に起業したのも、高校時代の友人に誘われたからなんです。

高濱 橋村さんの仕事物語は、まず、テレビ局からでしたよね。

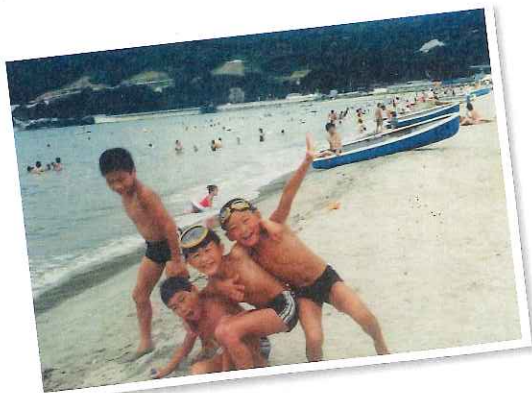
橋村 はい。大学は東京、就職は地元テレビ局です。青年時代は、華やかな世界にそこがれていましたから。大学時代はデイスコで黒服のバイトをしたり。野生児も変わるんです（笑い）。でも社会人になってから、またキャンプを始めましたよ。

高濱 華やかライフよりも、アウトドアライフを取り戻そうと。

橋村 週末ごとに、いろいろなキャンプ場に行きました。でも日本のキャンプ場って、景色も雰囲気も、日常との距離感がとても近いんです。ゴミゴミしてて、それが不満でしたね。

高濱 自分の思い描いているキャンプ場ではなかった。じゃあこのところから徐々に夢のキャンプ場へと、元野生児の狙いが向かっていったのかな。でもその前に、ITベンチャーの起業に携わっていますよね。

橋村 はい。友人の誘いもあったし、起業自体への興味もあったので。法人



小2の夏休み、友達とふざけ合う(右から2番目)。海は特別な場所ではなく、ごく普通の遊び場だった

何もないところで
何ができるか
キャンプは人間力が
問われる場なんです

(橋村)



キャンプという非日常と
ビジネスニーズを
つなげた眼力は
さすがですね

(高濱)

高濱 会社として必要悪とでもいうべき時期だったのかな。

橋村 そうですね。自分でも達成感があるようなしな。そんなモヤモヤを感じていたこともあって、休みの日に、より自分のイメージに近いキャンプ場になりそうな場所を求めて、あちこち探すようになったんです。

高濱 イメージしたのは、玄界灘？

橋村 はい！とりあえず環境が似ていそうな房総半島や伊豆半島などをロケハンしました。そこで見つけたのが、後に「アクアヴィレッジ」としてオープンすることになった、西伊豆の陸の孤島です。ここは素晴らしかった。プライベート別荘と称して、仲間と遊びにきました。ドレスコード・裸族、みたいな感じで(笑い)。

高濱 野生児復活！だね。

キャンプがもたらす「非日常性」
その驚くべき効果を実感

橋村 そうなんです。そんな経験もあったので、ために会社のスタッフをキャンプに連れていったんです。そうしたらこれが、思った以上に効果があった。よく居酒屋で無礼講なんて言われるじゃないですか、その百倍以上の効果がキャンプファイアにはありました。火を囲むと、心の扉が開くというか、風通しがよくなるというか。大げさではなく、そのあと会社の雰囲気が変わったんです。みんながチームとしてつながるようになった。結果的に

生産性も上がったんです。このころからですね。キャンプなるものは、個人だけでなく企業、ひいては日本にとって素晴らしい影響を与えうるものではないかと思うようになったのは。

高濱 ひとつの立派なビジネスモデルとして成立するのではということだね。実際、いま提供している場所は、大人のキャンプ場としてだけでなく、企業研修の場として使われることも多いとかここに目をつけたのは、本当に素晴らしいと思います。

橋村 最初は、いつかできたらいいなというぼんやりしたものだったのですが、僕の背中を押す二つのきっかけがありました。一つは中国への単身赴任。もう一つは病気で。

高濱 もう結婚していたんですか？

橋村 はい。初の海外進出で、僕は偵察隊みたいなものだったので、単身で行きました。ところが中国の都会はあまりに自然が遠くて、空気が汚い。自分には合わない、もうやめようと思いました。封印していたキャンプ熱が燃え上がったんです。すぐに伊豆に移住して、あの秘境を大人のキャンプ場につくり替えようと決心しました。

高濱 中国に行ったことで、かえって夢の熟成が早まったんだね。奥さんには相談したの？

橋村 妻には、中国と伊豆とどっちがいいかと聞きました。そしたら伊豆って(笑い)。ただその後、仕事の残務整理中に病気が見つかったんです。2カ

橋村 うーん、どうでしょう。うちはこ

くふつうの家庭でしたよ。父は農家にハウスマカンの栽培技術を指導していて、母は専業主婦で、妹が2人。母はけっこう口うるさかった。しつこく厳しかったな。とくに礼儀。あいさつはしっかりと、愛想よく、と言われました。家にいつもたくさんの方が出入りしていたから、そのあたりはきっちり言われました。

高濱 起業は、応援してくれた？

橋村 いや、反対されました。母はポンポンものを言うタイプで、『あんたには無理な、大成せん』とか、『そんな器じゃなか』とか平気で言ってくるから、こっちは『あーそつ』って聞く耳を持たない(笑い)。そうすると、最後は『勝手にせんね！』と放り出してくれる。そんな感じでした。

高濱 そうか、明るいなだね。カラッとしてるんだ。これって大切なんだよね。お母さんって、どうしても真面目にな

ってしまっから。

橋村 うちはいつも他人がいましたからね。本当に、突然アポなしで他人がズカズカと家に入り込んでくる。夜になると宴会も始まる。そうすると、母はずっとおもてなしをしていて、その合間に僕に小言を言う感じ(笑い)。僕は僕で、たくさん大人の人がいても、平気でテレビ見たり、本読んだり、ときにはおじさんたちの下ネタに笑ったり、可愛がってもらったり。そんな家庭でした。だからかな、昔から集中力はあると言われてました。周りが気にならず没頭できるというか。

高濱 そうか、なるほどね。橋村さんのバイタリティーのルーツがわかったぞ。山や海で遊びに遊んだ体験と、家に入りするたくさん大人のとの接触体験。自然に慣れているのと同じに、人や大人にも慣れているんだ。そういう原体験がある子は強いと思う。アフリカのことわざには、「一人の子どもが育つには、

一人の子どもが育つには
村一つが必要だ、という
アフリカのことわざのような
環境で育ったんですね

(高濱)



村一つが必要だ」というのがあるんだけど、まさにそれですね。

橋村 なるほど！僕のやりたいことも、それです。人を育てる村づくりなんです。大人になってからだって遅くない。そんな原体験の場、村づくりの場を提供し、増やす手伝いもできればいいなと思ってるんです。

対談を終えて

あふれる生命力の源は……

妹2人の長子長男。心配と愛情ゆえなのだが、母親にうるさく口出しされて、オスとしての迫力に欠けるおっとり型に育ってしまうことも多い。しかし、育ち上がったのは、人間力と生命力あふれる橋村さんだ。ここに、いま子育て中の親御さんたちが直視すべき大切な鍵がある。一つは、玄界灘で遊び尽くした総量。特にリアル「あまちゃん」であるおばあちゃんのウニとりを見つめて育ち、自分も潜って「獲物」を収穫していたこと。彼は「一番没頭していたと思います」と語っていたが、最高の集中力を育んだことは間違いない。もう一つは、毎日多くの大人が出入りする家だったということ。類いまれな営業力、物おしせず可愛がられる人柄は、多くの大人にもまれる中で育ったのだろう。多少口うるさく言われても、このような経験を与えられれば大物にも育つ。「いつも『勝手にせんね！』と言われてました」と母を語る橋村さんは最高の笑顔であった。

1日1組のキャンプ場、「AQUA VILLAGE(アクアヴィレッジ)」は団体での利用も多い。仲間同士のキャンプで絆を深める



“大人の秘密基地”をコンセプトにした「REN VILLAGE(レンヴィレッジ)」。大自然に囲まれた完全なプライベート空間だ

